



2026/01/09 08:10

### 日々好日

六八七号

(令和八年五月発行)

三月の卒業式、四月の入学式、そして五月のこどもの日。将来の我が国を担う子供達の元気溼刺なすがたを目にする季節ですが、京都府南丹市で11才の児童が父親の車で学校の敷地まで送られた以後、所在不明となつて連日、警察や消防団による懸命な捜索にもかかわらず発見されていませんでしたが、最悪の結末となり、残念なことです。当該児の心理や家族関係などわかりませんが、黄色のリュックサックが見つかった場所など不可解なことが多い。

こうした機に改めて親子の関係を見つめなおしてみたい。子供は親の背中を見て育つと言われていますが、子育てを母親まかせにしている家庭も今の時代ないことではないでしょう。

地位のある大人の不祥事が連日のように報じられていますが、自信をもって子に背中をみせられる親はどのくらいあるのでしょうか。

それを意識することによつて親も子によつて育てられていることを知ることもなりましょう。

我が子はもとより近隣のこどもたちにも慈愛の眼をそそいで見守りたい。

#### ※ 弘法大師のお言葉

「物の情、一ならず。飛沈性異なり、この故に聖者の人を驅るに教網三種あり。いわゆる釈李孔なり。浅深隔てありといえども、ならびにみな聖説なり、若し一の羅に入りなば何ぞ忠孝に乖かん」(三教指帰巻序)



山 川  
草 木

草 木  
国 土

悉 皆  
仏 性

悉 皆  
成 仏

# 好日



前置きが長くになりましたが、ここで大師後半生、それも四十才以降の御行跡を辿ってみましょう。

四十歳・(弘仁四年(八二二)十一月二十三日)

最澄よりの理趣経の借覧の申し入れに対して断りの手紙を出す。日本天台宗の祖最澄と空海は平安佛教の二大巨星であるといわれていますが、最澄は空海より七才も年長であり、桓武天皇の庇護のもと一世の師表たるの身分も顧みず一介の青年の空海に辞をひくくして請来の佛典の借覧を請い灌頂も受けています。

その新来の密教経典の借覧は幾度となく繰り返され、空海からたびたび返却の書状を受け取っているほどですが、この理趣経の借覧の申し出には空海は峻烈な言葉で断っています。その手紙の一節を挙げてみよう。

「それ秘蔵の興廃はただ汝と我となり。汝もし非法にして受け、われもし非法にして伝えなば将来求法のひと、何によつて求道の意を知ることを得ん。」

非法の伝授これを盗法と名づく。すなわちこれ仏を誣くなり。また秘蔵の奥旨は文を得ることを貴しとせず。ただ心をもつて心に伝えるにあり、文はこれ糟粕、文はこれ瓦礫なり。糟粕瓦礫を受ければすなわち粹実至実を失う。実を棄て偽を拾うは愚人の法なり。愚人の法には汝随うべからず。また、求むべからず。云々」

この一見冷酷のようにみえる空海の態度には、密教の本義

(意心伝心) に立たなければ正しい法を伝えることは出来ないという厳肅さがあつたことが窺われる。



四十二歳 「弁頭密二教論」撰述

四十三歳 (弘仁七年六月十九日) 上表して高野山の下賜を

請う。七月八日に勅許あり、高野山を賜う。

「金刹銀台、櫛の如く朝野に比び義を断ずる龍象(高僧) 寺毎に材を成す。法の興隆(こ)において足んぬ。ただ、恨むらくは高山深嶺に四善の客乏しく、幽藪窮巖に入定の寶希なり。」

実にこれ禅教未だ伝わらず住処相心せざるの致すところなり。今禅経の説に準ずるに深山の平地もつとも修禅によろし。

空海少年の日、好んで山水を渉覧して吉野より南に行くこと一日、更に西に向つて去ること兩日にして平原の幽地あり。名づけて高野という。

計るに紀伊の国伊都郡の南に当たれり。四面高嶺にして人蹤蹊絶えたり。

今思わく上は国家の奉為に、下は諸々の修行者のために、荒藪を葺り夷げて聊か修禅の寺院を建立せんと。云々」

四十六歳 東大寺に「金光明四天王護国寺」の額を揮毫。 「秘密曼荼羅教付法伝」・「即身成仏義」・「声字実相義」・「吽字義」を撰述。

高野山に鐘を造立するための「知識の文」を草す。

「金剛峯寺は堂舎幽寂にして尊容堂に満ち禅客房に溢れども、鴻鐘未だ造らざす。

今思わく、四恩の奉為に七尺の銅鐘を鑄造らんと。しかりといえども道人清乏にして志あつて力なし。

伏して乞う、有縁の道俗おのおの涓塵を添えてこの願を相い濟え。生生に如来の梵響を吐き世世に衆生の苦声を脱せん。今、至願に任えず、謹んで勧め奉る」



(高野四郎の鐘)

四十八歳（弘仁十二年五月二十七日）

讃岐国万濃池の修築別当に補せられる。

「今は昔、讃岐国多度の郡に万能の池という極めて大きな池あり。

その池は弘法大師の其の国の衆生を哀つるが為に築き給える池なり。」

池の廻り遙かに広くして堤を高く築き廻らしたり。池などとは不見して海とぞ見えたり。

池の内底ひ無く深ければ大小の魚共量無し。亦竜の栖としてぞ有りける」

（今昔物語集卷第二十）

大宝年間（七〇一）

七〇三）に灌漑用に開墾されたもので、三方を山に囲まれ、南が谷口になっている。水量が多い為に水圧が高く、度々決潰し、弘仁九年のそれは收拾し難いもので朝廷は路浜継を築池使として派遣し、修築に当たらしむるも三年を経過するも完成にいたらず、そこで讃岐出身の空海に修築にあたらせたもので、わずか三か月で完成をみたのである。

それは空海を父母のように慕って集まった労働力に加え大師の土木技術の知識によるものであり、更に巖上で護摩を焚いて天神地祇の加護を祈ったことも力となったに違いありません。

因みに満濃池は周囲二十キロ、最大水深三十一メートル。灌漑面積四六〇〇平方キロという。



（讃岐万濃池・平成19年10月24日）

五十歳（弘仁二四年一月十九日）

東寺を給預せられ、請来の曼荼羅等を収蔵。勅命により教王護国寺と号す。

「それ東寺は遷都の始め、国家を鎮護するために柏原の先朝（桓武帝）の建つるところなり。乞う、この情を察して僧都等を率いて真教を讃揚し禍を転じて修し、国家を鎮護せよ」と（東宝記・弘仁十四年十二月二日の官符）

五十一歳 勅により、神泉苑において請雨法を修す。

五十二歳（四月二十日）東寺講堂建立の勅許。

五十五歳（天長五年十二月十五日）

綜芸種智院を開設

「貧道、物を濟うに意あつて竊に三教の院を置かんことを遮幾う。一言響きを吐けば、千金すなわち応ず。永く券契を捨てて、遠く冒地を期す。給孤の鐘を敷くことを勞せずして、忽ちに勝軍の林泉を得たり。本願忽ちに感じて名を樹てて綜芸種智院という。」（綜芸種智院の式并に序）

庶民の学校の開設に、左九条の藤原三守宅を提供しても辣て、創設し、儒佛道の三教を兼学せしめ庶民教育を促進する趣旨と方法を述べている。その中で注目すべきは師資糧食のことを具体的に述べている。

「それ人は懸瓠に非ずというは孔丘の格言なり。みな食によつて住すというは釈尊の所断なり。しかればすなわち、その道を広めんと欲せば、必ず須らくその人に飯すべし。もしは道、もしは俗、あるいは師、あるいは資、学道に心あらんものはならびにみな須らく給すべし。云々」

これに対して最澄は「山家学生式」の中で、「凡そ得業の学生等の衣食は各私物を須ひよ。若し心才如法に骨法成就すれども、但だ衣食具わらずんば、この法の状を施し、檀を九寶に行じて其の人に充て行ふべし」と述べ

ています。

空海は先生も学生も衣食はこれを保証すると言うつて  
いるのと好対照であるのは驚きである。

五十六歳 和氣真綱・仲世等、神護寺を空海に付嘱す。  
五十七歳 「秘密曼荼羅十住心論」・「秘藏寶鑰」を撰述。  
五十九歳 (八月二十二日) 高野山に於いて万燈万華会を  
修す。

「ここに空海、もろもろの金剛佛子等と金剛峯寺に於いて  
聊か万燈万華の会を設けて、両部曼荼羅、四種の智印に奉  
献す。期するところは毎年一度、このことを設け奉って四  
恩に答え奉らん。

虚空尽き、衆生

尽き、涅槃尽きな  
ば我が願も尽きん。

しかればすなわ

ち金峯高く聳えて

安明の陪樓を下し

睨、玉毫光を放つ

てたちまちに梵釈

の焔日を滅さん。

濫字の一炎忽ち

に法界にひるがえ

つて病を除き、質

多の萬華咲を含ん

で諸尊眼を開かん

云々」

(高野山万燈万華会  
の願文)

六十歳 この年、高野山を真然に付嘱し、実恵に助成せ  
しむ。



(奥之院燈籠堂)

六十一歳 (八月二十二日)

高野山に佛塔二基、両界曼荼羅を建立せんが為に勧進す。

「金剛峯寺に毘盧遮那法界塔二基、および胎藏金剛両部曼  
荼羅を建て奉る。しかも今、工夫多くして糧食給きがたし  
今思わく、諸々の貴賤四衆とこの功業を同じくせん。

一塵大嶽を崇くし、一滴広海を深くする所以は、心を同  
じくし、力をあわするが致ところなり。伏して乞う、もろも  
ろの檀越等、おのおの一錢一粒の物を添えて、この功德を  
相濟え。

しかれば営むところの事業不日にして成り、所生の功德  
万劫にして広からん。四恩は現当の説くに飽き、五類は幽  
頭の福を饒にせん。同じく無明の郷を脱し、齊しく大日の  
殿に遊ばん。敬つて勧む。

(勧進して佛塔を造り奉る知識の文・承和元年八月二十三日)



(高野山根本大塔)

(十二月十九日)・・宮中真言院後七日御修法許可

「伏して乞う、今より以後、一ぱら経法によって経を講じ、七日の間、まさに、解法の僧二七人、沙弥二七人を扨んで、別に一室を莊嚴し、別尊の像を陳列し、供具を奠布して真言を持誦せん。しかればすなわち、顯密の二趣、如来の本位に契い、現当の福聚、諸尊の彼岸を獲得ん。」

「宮中真言院の正月の御修法の奏状」：（明治以降は東寺で奉修）

六十二歳（三月十五日）：諸弟子に遺告

「吾れ入滅に擬せんとするは、今年三月二十一日寅の刻なり。もろもろの弟子ら、悲泣することなかれ。もし滅すれば兩部の三宝に帰信せよ。自然に吾れに代わって眷顧を被ぶらしめん。吾れ生年六十二、臘四十一なり。吾れ初めは思ひき、一百歳に及ぶまで世に住して教法を護り奉らんと。然れども、もろもろの弟子らを恃んでいそぎて永く即世に擬せんとするなり。（二十五カ条遺告第一条）

「夫れ以れば東寺の座主大阿闍梨耶は、吾が末世後生の弟子なり。吾が滅度以後、弟子数千万あらん間の長者なり。」

門徒数千万と雖も、併ら吾が後生の弟子なり。祖師吾が顔を見ずと雖も心ある者は必ず吾が名号を聞いて、恩徳の由を知れ。是れ吾れ、白屍の上に更に人の労を欲するにあらず。

密教の寿命を護り継いで龍華三庭に開かしむべき謀りなり。吾れ閉眼の後には必ず正に兜卒他天に往生して彌勒慈尊の御前に待すべし。

五十六億餘の後には必ず慈尊と御共に下生し祇候して、吾が先跡を問うべし。亦、且は未だ下らざるのあいだは、微雲官より見て信否を察すべし。

是の時に勤めあらば祐を得ん。不信の者は不幸ならん。努力努力（ゆめゆめ）後に疎かになることなかれ。『云々』

「吾れ、去んじ天長九年十一月十二日より、深く穀味を厭ひ専ら坐禪をこのむ。皆、これ令法久住の勝計、ならびに末世後生の弟子門徒らのためなり。」

正に今、もろもろも弟子ら、諦かに聴き諦かに聴け。吾れ、生期、今、いくばくならず。仁等、好く住して謹んで教法を守れ、吾れ永く山に歸らん」

以上、大師の四十才以降の行状を抜き出し、それに関する資料をほんの少しあげてみました。今日の長寿社会からみれば四十才は若造の域を出ませんが、お大師様のそれは、真言密教の正当な継承者として、自信満々のご活動で、押しも押されぬ存在であられたことを改めて知りました。

また、その多忙極まりない社会活動の中で、真言密教の教えである著述を次々となしてこられたことにも驚嘆します。まことに大雑把なことでしたが、お大師様の行跡のほんの一端でも知って頂きたい一念でのことです。心して旧三月二十一日をお迎え致したいものです。

### 高野山奥之院弘法大師御廟前奉納御写経

六六三

三卷奉納 岩国市装束町四丁目 福島 松代殿

二卷奉納 岩国市南岩国町二丁目 沖本あつ子殿

一卷奉納 岩国市通津 吉岡 律子殿

（三月十一日〜四月十日奉納分）



（奥之院弘法大師御廟）

# あとがき

二月末に突如始まった米国とイスラエルによるイラン侵攻は四十日を経て、パキスタンの仲介で二週間の停戦となり当事者間の協議となりましたが、初日から米国のバンス副大統領が帰国するなど交渉決裂の様相を呈してきました。残念なことです。

何物にも代え難い尊い人命が虫けらのように殺され、何んの罪咎もない人の平穏な日常を奪うことなど何人も赦されることはありません。

戦争はそれだけでなく自然環境を破壊し、限りある天然資源の浪費をし、世界中の国々が生活不安に追い込まれています。

當に世界中が無法地帯、無秩序の社会になっている現状を憂う毎日ですが、それは詐欺事件などの犯罪がうまれる土壌ができているのだと勘繰りたくもなりません。

三界の狂人は狂せることを知らず

四生の盲者は盲なることを知らず。

十悪、ころに快うして日夜に作り、

六度、耳に逆うて心にいれず、

人を謗じ法を謗じて

焼種の辜(つみ)を顧みず

(秘藏寶鑰卷上)



発行者

高野山真言宗

寶池山 龍門寺

吉岡 光昭

六道能化の地藏尊

如意の寶珠を

捧げ持ち

錫杖打ち振り

地獄まで

地藏菩薩の

御慈悲は

親に代わりて

見守りぬ

交通安全

学業成就



岩国市通津3634番地3 〒740-0044

高野山真言宗

寶池山 龍門寺 発行

電話 岩国(0827)38-4611